目　次

序　章　分裂と統合の弁証法……1
1　「モデル」から「先行者」へ　1
2　分裂と統合の弁証法　7
3　相対的後進国　12

第一章　解放と復興……17
——一九四〇年代
1　解放、対立、和解　18
2　経済復興　26
3　第四共和政の成立　33

第二章　統合欧州の盟主をめざして……43
——一九五〇年代
1　脱植民地化と欧州統合　44
2　復興から成長へ　51
3　第五共和政の成立　60
第三章　近代化の光と影……69
——一九六〇年代
1　「栄光の三〇年」　70
2　近代化のなかで　78
3　五月危機　86
第四章　戦後史の転換点……95
——一九七〇年代

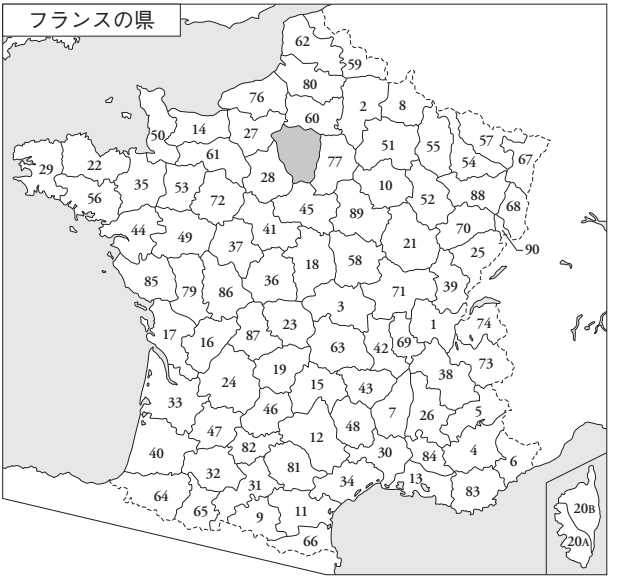
1　過渡期としてのポンピドー政権　96
2　「栄光の三〇年」の終焉　105
3　分裂する社会　114

第五章　左翼政権の実験と挫折……123
――一九八〇年代
1　ミッテランの実験　124
2　新しい社会問題　134
3　異議申立ての諸相　141

第六章　停滞、動揺、模索……151
――一九九〇年代
1　争点化する欧州統合　152
2　動揺する社会　160

3　模索する政治　168
第七章　過去との断絶？……177
——二〇〇〇年代
1　「古いフランス」と「新しいフランス」　178
2　グローバル化　188
3　ポピュリズム　196
終　章　その先へ……201
あとがき　209
年　表
索　引

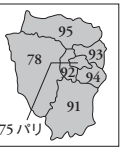
26　ドローム／ヴァランス
27　ユール／エヴルー
28　ユール=エ=ロワール／シャルトル
29　フィニステール／カンペール
30　ガール／ニーム
31　オート=ガロンヌ／トゥルーズ
32　ジェール／オーシュ
33　ジロンド／ボルドー
34　エロー／モンペリエ
35　イル=エ=ヴィレヌ／レンヌ
36　アンドル／シャトールー
37　アンドル=エ=ロワール／トゥール
38　イゼール／グルノーブル
39　ジュラ／ロン=ル=ソニエ
40　ランド／モン=ド=マルサン
41　ロワール=エ=シェール／ブロワ
42　ロワール／サン=テティエンヌ
43　オート=ロワール／ル=ピュイ=アン=ヴレー
44　ロワール=アトランティーク（旧ロワール=アンフェリユール）／ナント
45　ロワレ／オルレアン
46　ロット／カオール
47　ロット=エ=ガロンヌ／アジャン
48　ロゼール／マンド
49　メーヌ=エ=ロワール／アンジェ
50　マンシュ／サン=ロ
51　マルヌ／シャロン=アン=シャンパーニュ
52　オート=マルヌ／ショーモン
53　マイエンヌ／ラヴァル
54　ムルト=エ=モーゼル（旧ムルト）／ナンシー
55　ムーズ／バール=ル=デュク
56　モルビアン／ヴァンヌ
57　モーゼル／メス
58　ニエーヴル／ヌヴェール
59　ノール／リール
60　オワズ／ボーヴェ
61　オルヌ／アランソン
62　パ=ド=カレ／アラス
63　ピュイ=ド=ドーム／クレルモン=フェラン
64　ピレネー=ザトランティーク（旧バス=ピレネー）／ポー
65　オート=ピレネー／タルブ
66　ピレネー=ゾリアンタル／ペルピニャン
67　バ=ラン／ストラスブール
68　オ=ラン／コルマール
69　ローヌ／リヨン
70　オート=ソーヌ／ヴズル
71　ソーヌ=エ=ロワール／マコン
72　サルト／ル=マン
73　サヴォワ／シャンベリー
74　オート=サヴォワ／アヌシー
75　パリ（旧セーヌ）／パリ
76　セーヌ=マリティーム（旧セーヌ=アンフェリユール）／ルーアン
77　セーヌ=エ=マルヌ／ムラン
78　イヴリヌ（旧セーヌ=エ=オワズ）／ヴェルサイユ
79　ドゥー=セーヴル／ニオール
80　ソンム／アミアン
81　タルン／アルビ
82　タルン=エ=ガロンヌ／モントーバン
83　ヴァール／トゥーロン
84　ヴォクリューズ／アヴィニョン
85　ヴァンデ／ラ=ロシュ=シュール=ヨン
86　ヴィエンヌ／ポワティエ
87　オート=ヴィエンヌ／リモージュ
88　ヴォージュ／エピナル
89　ヨンヌ／オセール
90　ベルフォール／ベルフォール
91　エソンヌ（旧セーヌ=エ=オワズ）／エヴリー
92　オ=ド=セーヌ（旧セーヌ）／ナンテール
93　セーヌ=サン=ドニ（旧セーヌ）／ボビニー
94　ヴァル=ド=マルヌ（旧セーヌ）／クレテイユ
95　ヴァル=ドワズ（旧セーヌ=エ=オワズ）／ポントワーズ



県と県庁所在都市

＊番号は，フランスで現在使われている県番号

パリ地域



1　アン／ブル=カン=ブレス
2　エーヌ／ラン
3　アリエ／ムーラン
4　アルプ=ド=オート=プロヴァンス（旧バス=ザルプ）／ディーニュ
5　オート=ザルプ／ガップ
6　アルプ=マリティーム／ニース
7　アルデシュ／プリヴァ
8　アルデンヌ／シャルルヴィル=メジエール
9　アリエジュ／フォワ
10　オーブ／トロワ
11　オード／カルカソンヌ
12　アヴェロン／ロデズ
13　ブシュ=デュ=ローヌ／マルセイユ
14　カルヴァドス／カーン
15　カンタル／オーリヤック
16　シャラント／アングレーム
17　シャラント=マリティーム（旧シャラント=アンフェリユール）／ラ=ロシェル
18　シェール／ブールジュ
19　コレーズ／チュル
20A　コルス=デュ=シュド（旧コルス）／アジャクシオ
20B　オート=コルス（旧コルス）／バスティア
21　コート=ドール／ディジョン
22　コート=ダルモール（旧コート=デュ=ノール）／サン=ブリユー
23　クルーズ／ゲレ
24　ドルドーニュ／ペリグー
25　ドゥー／ブザンソン

序章　分裂と統合の弁証法

1　「モデル」から「先行者」へ

本書の課題は、第二次世界大戦以後を「現代」と呼んだうえで、今日に至るフランス現代史を、一〇年単位で概説することにある。その際、現代フランスの最大の特徴は「分裂と統合の弁証法」にあると考え、この点に着目して時間の流れを追うことにしたい。

しかし、なぜ、いま、フランス現代史なのか。

そして、それにしても「分裂と統合の弁証法」とはなにか。

日仏の現在

二一世紀の日本において、フランスはいかなる存在としてあるのか。

経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）が公表しているデータ（日本は二〇一七年、フランスは一五年）にもとづき、いくつかの点について両国を比較してみよう。

経済の領域についてみると、ともに一人あたり国内総生産（ＧＤＰ）は約四万ドル、平均収入は約四万ドル、平均寿命はほぼ八〇歳など、国の「豊かさ」を表す指標はほぼ同じ値であり、また高い水準を達成している。両国は、いわゆる先進国に属しているといってよい。

実際にフランスを訪れてみると、ひとによって異なるかもしれないが、「違う」というよりは「似ている」という印象を受けるほうが多いだろう。たとえばスーパーマーケットに入ると、品ぞろえや雰囲気など、わたしたちにとってなじみぶかい空間が広がっている。陳列棚に並べられている商品の価格も、ユーロと円のレートによって変化はあるが、ものすごく高いとか安いとかいった感じはしないはずだ。

これに対して社会の領域では、両国の違いが目立つ。失業率は、日本が約三％なのに対して、フランスは一〇％をこえている。また、当該年度の移民受入れ数は、人口が倍近い日本（約六万人）は、フランス（約二五万人）の四分の一にすぎない。今日の先進国では、失業とりわけ若者の失業や、大量の移民は、しばしば社会問題をひきおこし、それを含めて、その是非や解決策のありかたが重要な政治的争点となることが多い。その意味では、日本のほうが安定した社会を実現しているといえるかもしれない。

実際、一九七〇年代の石油危機以降、フランス経済は長期の衰退過程に入るが、それは何よりも大量失業、とりわけ若者の就職の困難として発現した。そして、ここから生じた人びとの

不満は、多くは、職を奪う存在とイメージされた移民や移民子弟（なお本書では、移民の若者を移民子弟、そのうちフランス国籍をもつものを移民二世と呼ぶ）にむけられ、排外主義的な主張を声高に叫ぶ国民戦線（Front National、二〇一八年六月に国民連合 Rassemblement National と改称）など政治勢力の支持基盤を構成した。さらに、この事態に反発する一部の移民は、九〇年代から不安定化する中近東・北アフリカの政治情勢と共鳴し、パリをはじめとするフランス各地でテロリズムに走り、今日に至っている。

このような状況において、わたしたちがフランスから学ぶべきことや学びうることは、なにか存在するのだろうか。経済の領域では、ほとんど同じパフォーマンスを実現しており、また社会や政治の領域では、むしろ日本のほうが安定度の点で優位に立っている、という今日の状況において。

モデルとしてのフランス

日本が開国し、フランスと本格的な交流を開始して以来、日本にとってフランスがいかなる存在だったかを振返ってみよう。

日本が開国した一八五〇年代は、フランスでは、第二帝政（一八五二―七〇年）と呼ばれる時期にあたる。第二帝政期のフランスを治めた皇帝ナポレオン三世は、いちはやく産業革命に成功

して世界のリーダーとなっていたイギリスに追いつく（キャッチアップする）べく、政府の主導のもと、工業化を強力に推進した。これにより、フランスは帝政期末までに産業革命を完了する。一八六〇年には英仏通商条約が結ばれ、両国間における輸入禁止措置の撤廃と関税の大幅な引下げが実現されるが、これはフランス産業革命の完了が間近であることを意味した。開国当時の日本人の目に映ったのは、世界のトップランナー・イギリスに追いつかんとするフランスの姿だったのである。

その後フランスは、ドイツとの戦争（独仏戦争、一八七〇―七一年）に大敗して第二帝政の崩壊を招くも、つづく第三共和政（一八七〇―一九四〇年）に入って北アフリカ・東南アジアなど各地に植民地を獲得し、二つの世界大戦に勝利し、第二次世界大戦後は脱植民地化、欧州統合、高度経済成長をすすめるなど、列強あるいは先進国というイメージをふりまきつづけた。そのため、開国後の日本にとり、フランスは、つねに、イギリスやドイツ、さらにはアメリカ合衆国（以後、合衆国）とならび、見習い、模倣し、さらには追いつき追いこすべき「モデル」として存在してきたといってよい。

とりわけ第二次世界大戦後の日本では、政治、経済、社会の民主化が主要な課題とみなされたことから、フランス革命など幾度もの革命や、パリ・コミューン（一八七一年）など諸反乱の経験を有するフランスは、いわば「民主主義の祖国」とみなされ、きわめて重要なモデルとし

て捉えられた。さらにまた文化の領域では、ファッション、料理、思想などをリードする「美(うまし)国」として、人びとのあいだで絶大な人気を誇ってきた。

フランスは、長いあいだ、日本にとっての「モデル」だったのである。

しかしながら、先述したとおり、とりわけ一九七〇年代以降、フランスは政治、経済、社会の諸領域で、さまざまな問題に直面し、場合によっては日本の先行を許すに至った。これ以降、モデルとしてのフランスを語ることは不可能な、あるいは、少なくとも困難な営みとなった。

先行者としてのフランス

それでは、フランスを観察し、語ることは、今日においては無益なことなのか、といえば、そうではない。わたしたちにとってフランスは、見習うべき「モデル」ではなくなったかもしれないが、依然として「先行者」として存在しつづけているからだ。

ここでいう「先行者」とは、わたしたちが直面している、あるいは近い将来に直面することが予想されている諸問題について、すでに直面し、対策を模索し、対応や解決に成功あるいは失敗し、その経験によって、わたしたちに正または負の教訓を与える存在である。実際、さまざまな領域において、フランスは、日本にとっての先行者とみなせるし、またみなすべき存在である。

たとえば、今日の日本にとって最大の問題のひとつが、少子高齢化と、それに伴う人口減少であることは、いうまでもないだろう。日本の合計特殊出生率は一九七五年に二を切り、二〇〇五年には一・二六にまで低下した。その後、一六年には一・四四にまで回復しているが、出生者数は減少の一途を辿っている。それに伴い、総人口も〇九年から減少に転じ、今日に至っている。少子高齢化や人口減少は経済活動の停滞や社会システムの弱体化をもたらすから、この事態に適切に対応するための施策が、さまざまに構想され、あるいは試行されている。

ここで目をフランスに移すと、少子高齢化や人口減少という問題は、彼の地ではすでに一九世紀後半に現出していたことがわかる。同時期の自然増加率（出生数から死亡数を引いたものの対人口比）は二％程度であり、これは他国と比して圧倒的に低かった。六五歳以上の人びとが総人口に占める「高齢化率」が七％をこえる社会を通常「高齢化社会」と呼ぶが、高齢化社会になったのは、日本が一九七〇年に対して、フランスはじつに一八六四年である。また、二〇世紀前半、フランスの総人口は四〇〇〇万人前後を維持し、ほとんど増えなかった。総人口が増加しはじめるには第二次世界大戦の終了を待たなければならない。

わたしたちにとって、フランスの歴史は先行者の歴史である。そして、その成功と失敗は重要な教訓として機能しうる。その点において、わたしたちがフランス、とりわけその歴史から学ぶべきことや学びうることは、依然として存在しているといわなければならない。

2　分裂と統合の弁証法

深く重層的な分裂

それでは、フランス、とりわけ現代フランスは、いかなる特徴をもっているのか。日本と比較したとき、その独自性はいずこに見出されるか。

本書では、現代フランスの最大の特徴を「分裂と統合の弁証法」という言葉で表現したい。「分裂と統合の弁証法」とは聞きなれない言葉かもしれないので、まずこの点について説明しておこう。

現代フランス史は、たがいにおおきく異なる立場に立つアクターたちが相対立するなかで動いてきた。そこにおいてまず印象的なのは、彼らの立場のあいだの距離の大きさと、対立の激しさである。

これは、現代に限ったことではない。一七八九年のフランスをみてみよう。数年来の天候不順による不作、国王政府による中央集権化の進行、のちに第二次百年戦争と呼ばれるほどにひきつづく戦争による国力の疲弊と増税の試みなどにより、国民の不満は高まっていた。もっとも、ここでいう「不満」の具体的な内容や志向性は、階級、階層、身分により、あるいは一人

ひとりの状況により、おおきく異なっていた。

大貴族たちの多くは、国王政府による中央集権化がみずからの特権をほりくずしつつあることに不満を抱き、政治・経済・社会の諸領域で特権身分（第一身分すなわち聖職者と、第二身分すなわち貴族）が実権をにぎり、権力をふるう中世に回帰することを望んだ。

これに対して一部の聖職者や貴族と、平民は、フランスが依然として身分制社会的な色彩を残していることを批判し、すべてのメンバーすなわち国民が同一の権利と義務をもつ国家を創造することを主張した。

両者の志向性のベクトルは正反対の方向をむいていた。ただし、両者は国王政府による中央集権化反対という一点で共通していた。そして、この点において、両者は、意図してかせずにか、フランス革命の勃発に貢献する。

フランスは、さまざまな領域において、そして、さまざまな争点をめぐって、つねにふかく重層的に分裂してきたのである。

「外部」による統合

もっとも、フランスの歴史を「分裂」の相だけで捉えていては、事態の一面のみをみているにすぎない。複数の層でふかく分裂し、相対立するアクターは、社会の「外部」にある力によ

って「統合」されるのが常だったからである。

これもまた、現代に限ったことではない。一八四八年冒頭のフランスをみてみよう。当時のフランスは、一定額以上の納税をなす成人男子のみに選挙権を認める制限選挙制度にもとづく立憲王政（七月王政）という政体をとっていたが、選挙権を得られない中下層の人びとの不満はつのり、これまた数年来の天候不順にもとづく不作、食料価格上昇、工業製品需要低下のなかで、革命として爆発した。いわゆる二月革命と、それによる共和政（第二共和政）の成立である。

革命を担ったのはおもに中間層（ブルジョワジー）と民衆（労働者・下層民など都市民衆、小農・農業労働者など農村部民衆）であるが、前者は、富と能力にもとづく社会的上昇（出世）を信奉し、それゆえ所有権を最重要視した。これに対して後者は、社会的上昇を実現することよりも自分や家族の生命と生活を維持することのほうを緊要の課題とみなし、したがって所有権に対する生存権の優位を主張した。そうである以上、革命という一大イベントが終わり、男子普通選挙制度の導入をはじめとする一定の改革が実現されるや、両者がただちに対立しはじめるのは、当然の理であった。

同年末、両者の分裂のなかで大統領選挙が実施されるが、圧倒的な得票で勝利したのは、中間層の代弁者ウジェーヌ・カヴェニャック（Eugène Cavaignac）でもなく、民衆の代弁者フランソワ・ラスパイユ（François Raspail）でもなく、長年の亡命生活から帰国したばかりのルイナポレ

オン・ボナパルト(Louis Napoléon Bonaparte)すなわち、かのナポレオンの甥であった。

選挙権を得たばかりの多くの有権者は、いわば外部から来た彼に対して、分裂していたフランスの統合を期待したのである。

フランス史は、「分裂」と「統合」が、二つのベクトルとして、場合によっては対立的に、場合によっては相補的に、機能しつつせめぎあい、そのなかで二つのプロセスとして交互に出現しては消えてゆくような、そういった時空間であった。

分裂と統合の弁証法

ただし、プロセスとしての分裂と統合が一巡したのちに現出するのは、一巡前に存在した元の二者とは異なったものである。このプロセスは、いわば円環ではなく螺旋を描くものとして理解されなければならない。相対立する二つのものが統一され、そのなかで新しいものが誕生する——本書が分裂と統合の繰返しからなる現代フランス史の特徴を「弁証法」と呼ぶのは、そのためである。

そして、三たびこれもまた、現代に限ったことではない。一八七一年のフランスをみてみよう。前年に始まったドイツ諸邦との戦争は圧倒的なドイツ優位のまま進み、フランスは戦争継続派と停戦派に分裂した。両派の角逐のなかで共和国行政長官の地位についたアドルフ・ティ